

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～横浜市～

○横浜市の課題(●授業改善 ●小中高連携)とその分析

○課題解決のための具体的な対策

・具体的な取組内容

○課題(●授業改善 ●小中連携)

→研修協力校の指定

各校の指導担当大学教授等を決定。年間複数回校内研修会の実施。

- 5ラウンドシステムを取り入れた授業
- CAN-DOリストを基にした授業改善
- 担任が進める外国語活動
- 小中・中高連携

研修協力校の 指定

課題に基づいたテーマ
設定

小学校2校 中学校6
校 高等学校1校

→教員研修

大学教授等を講師に迎えた横浜市独自研修の実施

テーマ例:外国語活動の授業づくり、CAN-DOリストを活用した授業づくり、
英語で進める授業、基本となるスピーキング活動 等実施

→公開授業研究会の実施

研修指定校がその研修の成果を踏まえた授業実践を公開。授業後に研修の成果
の発表と共に、授業について指導担当教授を交え市内教員との共有を行う。

平成29年度 4回実施 平成30年度 5回実施

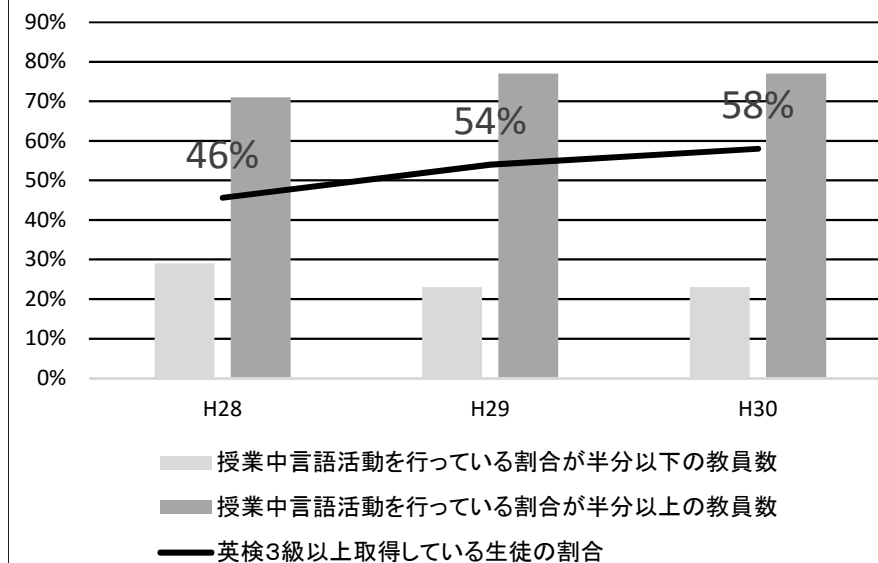
「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～横浜市～

・成果と課題

→(成果)本事業に基づいた、公開授業の実施及び研修会等の実施を通じ、教員の意識が高まり、授業改善につながった。また、授業改善に伴って、生徒の英語力の向上も見られた(図参照)。

(課題)授業改善は進んでいるが、CAN-DOリストの設定及び活用については、未だ課題である。CAN-DOリストを基に、生徒の到達状況を把握している割合は、H29年度20%、H30年度は24%となっている。指導と評価の一体を更に意識した授業改善を目指していきたい。

授業の実際と生徒の英語力



・成果の波及・周知について

→公開授業研究会の設定。研修協力校による研究報告及び、大学教授等による指導助言を共有できるように設定し、波及・周知を図っている。

・課題解決のための手立て→課題(●授業改善 ●小中高連携)を改善していくために、

●教員の指導力向上
●授業改善の具体の提示(テーマに基づいた研修協力校の設置)を計画。

大学教授等による系統だった専門研修の実施、及び研修協力校への指導助言を日常的に実施。

大学教授等を交え研修協力校における振り返り(教員の指導力等)を実施。

次年度以降の取組の課題の明確化を行う。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・小学校外国語の教科化を踏まえた小中の外国語と英語の連携。

具体の取組の内容

校種をまたいだ教員同士の意識を共有、ゴールを共有するためにお互いを知り、教員間のギャップをなくすことを目指した。

- ①教科書・教材の共有 ...語彙や表現、お互いにどのような英語を学ぶかを知る。
- ②中学入学時のアンケートを実施...小学校での取り組みや、子どもの能力を知る。
- ③実態把握 ...どのような英語に触れてきたのかを知る。
- ④お互いの授業参観 ...参観の頻度を増やし、お互いのことを知り、授業に生かす。

成果①

- ・中学校の学びを知ることで小学校として小学校外国語活動が担う役割について考えることができた。
- ・中学校の授業を見ることで、中学校がもつ、外国語を教える時のノウハウについて知ることができた。



中学校との連携からの学びを生かし、授業改善へとつなげた。

成果②

児童のふりかえりカード、「ゲームが楽しかった」や、「歌が歌えた」という感想から英語が「分かって楽しかった。」「英語を使ってしっかりと伝えられた」という児童が増えてくるようになってきた。

少し英語が好きになりました。

もっともっと英語をおぼえたいです。

「英語のいみがからなくて楽しかった。」

英語の楽しさを感じ、「もっと話したい。」という児童が増えてきた。

今後の課題・方向性

- ①教員研修
教科化にあたり全教員が中学校と連携を考えた授業展開を行うための研修。(中学校での学びとの連動の可視化)
- ②系統性を意識したカリキュラム編成
慣れ親しんだ表現を継続して用いることで、使う場面や意味を捉えられるようにする。

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～横浜市立帷子小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・担任が英語への苦手意識のある中、担任だけで授業を進める時間が増えたことを踏まえ、学年やブロック間で積極的に授業づくりや活動等、情報を共有する機会、場を設けた。
- ・「相手の話に興味をもち、最後まで聞こうとする力」の育成を目指し、必要性を生むことで、児童の気付きを重視した授業づくりを意識するようにした。

具体の取組の内容

○単元づくり・教材研究

- ・児童に、何に気付けたいかを明確にした授業づくり
- ・児童にとって、より身近な題材をもとにした授業づくり
- ・最終ゴールを意識した単元計画・単元構成

○活動づくり

- ・これまでに慣れ親しんだ表現を使って、「伝えたい」「聞きたい」という思いを引き出すような目的・場面・状況等の設定の工夫
- ・担任とAET、担任・AETと児童、と実態に合わせたSmall Talkにより、表現や思いを児童から引き出し、活動へとつなげる工夫

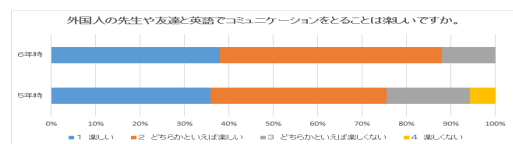
○市公開授業

- ・4学級公開することで、より教員間での外国語活動の授業に対する意識の高まりが感じられ、授業力向上につながった。

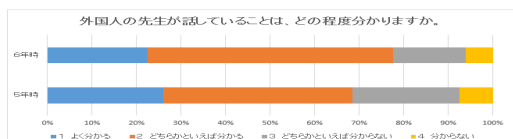
成果①

児童の変容(意識調査より)

- 伝わる喜びや伝える楽しさを感じながら、相手とコミュニケーションをとる姿が増えた。



- Small Talkによる担任やAETとのやり取りが増えたことで、話の内容に興味をもつ様子が多く見られ、内容の理解度も増した。



- 児童に何を身に付けさせたいかを明確にした授業では、児童の意欲的な姿が顕著に見られた。

成果②

教員の意識の変容(アンケートより)

- コミュニケーション能力の育成、ということ意識し、言葉の大切さを重視するようになった。
 - 英語に「慣れ親しむ」活動を工夫し、増やすようになった。
 - 自分の英語力を高める努力をするようになってきた。
- という声が多く、AET主導型に傾きがちだった授業から、担任がつくり、担任が進める授業の必要性を感じるようになっていく様子が見られる。

管理職から見た教員の変容

- 年度当初に比べ、「担任が一人で授業をする」ことに対して、肩の力が抜け、積極的な姿勢が見られるようになった。

今後の課題・方向性

AETの活用と連携

- ①授業のねらいの共有
- ②充実したインプットの量
- ③生きた英語を使っている児童との即興的なやりとり
- ④教員の英語力の向上

新学習指導要領を踏まえた授業づくり

- ①気付きを活用へとつなげる授業づくり
 - ②目的・場面・状況の設定を意識した単元づくり
 - ③文字への慣れ親しみと指導方法
 - ④カリキュラム・マネジメント
 - ⑤小中連携
- (同一ブロック内での授業参観と情報 共有)

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～横浜市立希望が丘中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

・教員それぞれが授業改善を意識しているが、見通しを持った共有にまではいたっていない。9年間のゴール(自分の意見を伝え、相手との意見交換ができる。)を目指した小中連携を意識した授業作りと授業改善。

取組の内容

- ・希望が丘ブロックの小中での、授業実践や研修会の実施。
- ・小中連携を意識した情報交換。

成果①

小中の教職員間での変容

- 小中教員でお互いの授業を見合い、知ることから始め、それぞれの授業で見たことを自らの学校に持ち帰り、授業に役立てることができた。
- お互いの教科書・教材を知り、小学校・中学校間でのお互いの学びを確認することで自らの授業改善が行えた。

中学校教員間の変容

- 他学年の授業を見合い研修し、大学の教授から助言をいただいたことで、希望が丘中学校生徒の学びを意識し実態に沿って授業改善を行うことができた。

成果②

小中連携を意識した授業

- 中学校一年次と小学校高学年を中心にお互いの授業を見合い研修することで、小中連携を意識したつながりの授業を意識して行うことができた。

教員からみた生徒の変容

- 会話活動を積極的に続けようとする生徒の様子が見られた。
- 活動を繰り返し、改善していく中で生徒がより活発に発言したり、会話を続けられるように生徒同士で働きかけるなどの姿が見られた。

今後の課題・方向性

中学校教職員の共通理解

小学校英語を生かした授業作りと、小中連携を意識した授業、また3年間で生徒に育てたい英語の力や姿勢を共有し、授業改善を行っていく。そして活動やアイデアの共有をはかり、活動中心の授業を作りを行うなどの授業改善をしていく。

新学習指導要領を意識した小中連携を大切にできる授業づくり

移行期である小学校の実態を把握し、中学校の学びをより実態に沿った内容にし、より効果的な授業行う。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～横浜市立大綱中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・3年間を見通した、外国語を用いて主体的にコミュニケーションを図る生徒の育成（CAN-DOリストの活用）
- ・教師の役割と機能を意識した授業づくり

具体の取組の内容

- ・input/outputを意識した単元計画の見直し
- ・ファシリテーションを意識した授業づくり

成果①

第3学年英検合格者推移
(2016~2018年度第2回受検者)

	2級	準2級	3級
2016年度	5/44	45/82	67/135
2017年度	15/48	52/90	72/150
2018年度	12/73	71/169	28/52

合格者数/受検者数

年度を追うごとに上の級を受検する生徒が増える傾向にある。

成果②

・教員から見た生徒の変容
授業時数を、教科書を活用したinput活動とspeaking/ writingを中心としたoutput活動それぞれ2時間ずつに分けて授業を行った。多くの生徒が基本表現を場面に応じて使おうとする姿勢が見られた。
また、単元計画を見直し、教師が担う役割を明確化したところ、どのような語彙や表現を使えば相手に伝わるかを考えながら活動する姿が見られるようになった。

今後の課題・方向性

- ①授業の構造化を図り、生徒の発達段階に応じた力を付けさせることができた。単元計画をさらに見直すとともに、評価計画についても精度を上げていく。
- ②表現活動で取り扱う話題の内容を深められない課題が見えてきた。英語で表現する技能のさらなる向上も目指しながら、他教科と連携して、生徒が考えを深めるための横断的な仕組みづくりを考えていく必要がある。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～横浜市立横浜吉田中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・学習に苦手意識がある生徒が多い。主体的に見通しをもって活動できるように授業をシステム化する。
- ・外国につながる生徒が多いため、互いの思いや考えを共有する機会を多く設定し、人間関係の構築を目指す。

具体の取組の内容

- ・5ラウンドシステムを取り入れた授業実践
- ・主体的かつ効果的な帯活動の実践

成果①

教員から見た生徒の変容

- 間違いを恐れずに英語を使って会話を楽しんでいる。
- 授業がパターン化されることで主体的に活動に取り組んでいる。
- 英語に苦手意識があっても粘り強く継続して取り組んでいる。
- ラウンドを重ねるごとに生徒の発話量が増加している。
- 生徒自ら新たな知識や表現を得ようとする姿が見られる。

生徒が感じている自身の変容

(Round4を終えた際の授業アンケートより抜粋)

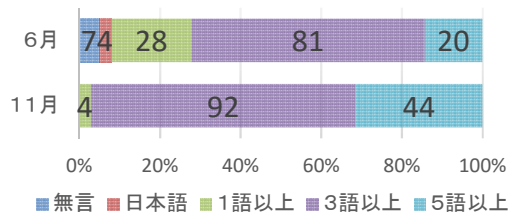
- ペアの人の話を聞いて使えるものがあったら使っている。以前より話せることが多くなったと思う。
- OCDに合わせて音読できるようになった。会話でも前より文を長くして話せたり、過去形や未来形に直して話すことができるようになったと思う。
- 前よりも全然話せるようになったし書けるようになった。また教科書を読んだだけでだいたいの意味が分かるようになった。

成果②

パフォーマンステスト等の結果

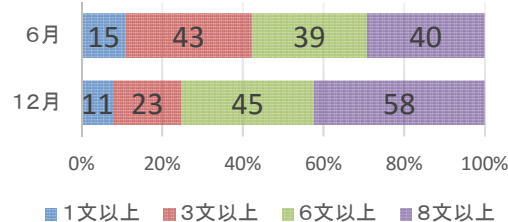
《1年会話テスト 発話語数(一文あたり)》

合計140名



《2年即興スピーチ 発話文数(40秒間)》

合計137名



今後の課題・方向性

①帯活動の充実

- 自分の経験やエピソードを交えて会話をする力の育成
- Reading教材を活用したスモールトーク
- イラストや写真を描写、説明する活動

②生徒間の学力差に対する支援

- 授業中にモニタリングした生徒の様子についての情報交換、現状分析の徹底
- すべての生徒が主体的に安心して活動できる教材や活動の工夫
- 自分の力や進度に合わせて取り組むことができる自主学習の提示および推進、指導

③来年度全学年実施に向けた体制作り

- 週一回の教科会の実施
- マイクロティーチングの実施
- 指導計画、Roundシステムに合わせたCAN-DOリストの検討と作成

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～横浜市立新田中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・CAN-DOリストを基にした授業実践(年間計画、単元計画、1時間の授業計画、評価を含む)
- ・パフォーマンステストの充実と評価方法、ルーブリックの検討

具体の取組の内容

- ・昨年度のCAN-DOリストを見直したものを基に、授業づくり・実践を行った。学年職員間で十分に年間計画、単元計画、1時間の授業、パフォーマンステスト、評価規準について話し合いをもつことができた。
- ・CAN-DOリストに設定したゴールを達成するためのパフォーマンステストの充実と評価(ルーブリック)の検討を行った。生徒にパフォーマンステストの評価方法について事前に提示し、ゴールを明確にさせて取り組ませた。
- ・新学習指導要領を意識した授業づくりを実践した。(領域の統合、Unitの統合、協働学習など)
- ・2か月に一度のペースで文教大学阿野幸一教授、西村秀之指導主事をお招きし、英語科教員全員が順に研究授業を行った。その後研究協議をもち、授業づくりについて共通理解を図った。
- ・市内で公開授業(7月)を実施し、市内中学校の先生と本校の取組の共有を行った。

成果①

教員の変容

- ・CAN-DOリストに基づいたパフォーマンステストを定期的実施しているため、ゴールを意識した授業づくりへと自然と授業が変わっていった。
- ・教員間(AET含む)で評価について話し合っている。よって生徒に評価について事前に明確に提示することができている。どうしたら生徒に力を付けさせられるか、その手だてを十分に話し合いできるようになった。

成果②

教員から見た児童生徒の変容

○生徒が力がつくと感じる学習活動について意識するようになり、その授業に価値を見出し、熱心に取り組む姿勢がみられる。

生徒感想アンケートから

- ・班の人と教え合って自分では思いつかなかった考えを取り込み、よりスピーチの内容を深めることができた。(1年)
- ・日々の会話活動で、会話をする時に話を終わらせないようにする力がついた。(2年)
- ・SEPROのDebateで主張するのが楽しかった。自分の考えを伝える難しさを知った。初めて会った外国の先生と即興で会話をする時に、いろいろな文法を使うなど工夫をした。(3年)

今後の課題・方向性

- ①生徒アンケートを定期的実施し、生徒の変容を把握していく。
- ②CAN-DOリストのゴールを意識したパフォーマンステストを継続して実施し、評価(ルーブリック)を十分に検討していく。
- ③新学習指導要領にある領域間の統合的な言語活動を工夫すること、より良い協働学習について検討し、授業実践していく。
- ④生徒とCAN-DOリストを共有できてしているが、保護者へはまだ。教育課程説明会資料で配付し、共有する予定。
(管理職と要相談)

平成29～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～横浜市立中川西中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・5ラウンドシステムをもとにした授業づくりの実践と今後の展望
- ・5ラウンドシステム導入による保護者、地域、職員の理解と協力

具体の取組の内容

- ・5ラウンドシステムによる授業展開(1学年・2学年)
- ・導入による教職員の研修
- ・授業参観、学校説明会、学校運営協議会等による取り組み状況の情宣活動
- ・公開授業の実施【区教科研究会 市英語指導力向上事業研修研究会】

成果①

H30.1実施の英検結果より

中1 1月 希望者受検 合格者

5級 37/40 92.5% 4級 81/97 83.5%

3級 25/36 69.4%

今年度もH31、1に実施予定。今回は、準2級まで受検級を広げる。1、2年生で277名の生徒が受検予定である。

授業アンケートより

2年生のR1では、満足度が少し低かった。教科書の本文が長く難しくなり、1年生でスラスラ読めたところから、いきなり振り出しに戻ったからである。しかし、ラウンドが進むにつれて、理解がどんどん深まり、生徒自身が内容を楽しめるようになってきたのに伴い満足度も上がってきている。2年目なので、昨年の活動の記憶があり、次への展望が持ちやすくなっている。

成果②

生徒の変容

・ペアで話せる内容が増え、その時間が楽しいと感じている生徒が多い。学び合い、助け合いの活動が充実しスローラーナーも一緒に活動できている。

・単語や文法など細かい点にこだわらずに、自分の思いや状況を表現しようとする姿勢が多くみられる。

・ライティングセルフチェックを始めて、正しい文の構成に目を配るようになってきた。

教員の変容

5ラウンド2年目の教員が再度1年生を教えていることで、長期的な展望をもって言語活動に取り組むことができ、効果的なプランニングができている。

学校の変容・5ラウンド導入による保護者、地域、職員の理解と協力

今後の課題・方向性

正確性を見据えた取り組み

- ・2年3学期後半から3年のR1に導入し、3年秋の11月をめぐりに3年間のまとめの授業を実施予定。
- ・初見の長文読解になれるため、2年R5期より、ショートリーディングを取り入れる。

単語力、文法力の深い理解

- ・2年R4期よりライティング後にセルフチェックの時間をとる。
- ・2年R4期より文法のまとめプリントで整理する。

教職員の授業力向上

- ・3年間を見通したシラバスを作成し、英語科教諭で計画を共有、見直しを図る。
- ・毎週の教科会で指導方法や教材の情報共有を行い、また評価基準をすり合わせる。
- ・生徒の状況や要望、困り感を共有し、その時期の課題に合わせた指導を行う。

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・帯活動でのスモールトーク等、ラウンドシステムに関する教員研修の充実
- ・中高での情報交換を基にした6年間で正確性を磨いていく指導計画の作成

具体の取組の内容

- ・月に1度外部講師(金谷憲 東京学芸大学名誉教授)を招いた中高の授業参観および協議会を開催し、その中で具体的な指導技術、指導内容について主に「中高接続」という視点で協議した。
- ・日頃から中高問わず互いの授業を積極的に見学し合い、意見交換を行った。
- ・来年度からより計画的に文法事項等に焦点を当てられるよう、日々の授業におけるフィードバックや生徒の反応をデータとして残し、いつ頃どのような指導をしたか一目で分かるように工夫をした。
- ・新テストをふまえた6年間の学習指導方針について検討した。高校では各学年における5領域の目標を作成し、中学と共有した。
- ・新テストへ向けたライティング指導のマイルストーンについて検討を重ねた。

成果①

・教員および生徒の変容(中学)

○授業を気軽に見学し合える雰囲気が出てきたことで、教員の授業改善につながった。
○生徒の反応やフィードバックの記録をとることで、来年度の文法指導の見通しがもてるようになった。

○学年が上がるにつれて即興性の中に正確性(特に語順)も備わってきている。

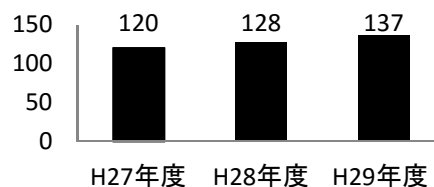
・教員および生徒の変容(高校)

○共通指導案により担当者間の会話が増え、帯活動等の授業改善につながった。
○生徒間フィードバックを工夫したことで、流暢さに加え、生徒が正確性へ目を向けるようにさせることができた。

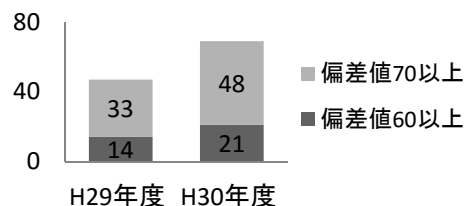
成果②

外部試験等の結果

《中学》英検準2級以上の取得数



《高校》現高2生 河合塾第2回全統模試結果の推移



今後の課題・方向性

①データに基づいた計画的な文法指導

- 今年度のデータを基に、計画的な文法へのフォーカスを行い、汎用性の検証を行う。
- 検証に基づき指導計画の見直しを行う。
- 公立一般校でも行える汎用性を目指す。

②中高連携のより一層の推進

- 中高の役割を互いに理解する。
- 中高問わず積極的に授業参観、情報交換を行う。
- 可能な範囲で中高教員が相互に入れ替わって授業を行う。